

令和元年6月18日現在

機関番号：32643

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13587

研究課題名（和文）「人種」「民族」の概念をめぐる文化人類学と教育学をつなぐ学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary Research about the Concept of "race" and "ethnicity" in Anthropology and Pedagogy

研究代表者

中山 京子 (Kyoko, NAKAYAMA)

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号：50411103

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：「人種」は歴史的につくられた「概念」であるにも関わらず、日本の学校教育における「人種」「民族」の扱いは旧態依然とした解釈に基づき教えられてきた。

そこで本研究では、まず、教科書における「人種」「民族」の取り扱いの変遷を調査し、現在の児童・生徒・教員の「人種」理解の実態を調査した。そして、文化人類学の成果が教育に反映されている海外の教育事例を収集してモデルとなる授業案を検討した。また、植民地主義によって人の交わりが多く、「人種」「民族」の問題にさらされ続けたマリアナ諸島先住民チャモロに焦点をあて調査を行なった。

また、研究者や教員と研究会をたちあげ、教材開発や教員研修での研究成果普及を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本では文化人類学の研究成果は、歴史学や科学などの他の学問と比べて、学校教育にあまり反映されてこなかった。そして、教師の思考や教材の内容は学問の進展とは乖離していた部分があった。それは文化人類学と教育をつなぐ学際的な研究や実践の試みが不十分であったからである。

多文化社会が進展し、地域や学校には多様な風貌や文化的背景の人々が混在する中で、日本人が未だにもつ「人種」という概念が、差別意識を助長しかねない。本研究により日本の教育に文化人類学の研究成果が反映され、人類の様相に関して進んだ理解をもつ外国の教育事例に学び、児童生徒、教員の意識改革に貢献できるという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Historically, teachers in Japan have taught "race" and "ethnicity" through an unchanging viewpoint essentially establishing the terms as a concept. In this study, I first surveyed how "race" and "ethnicity" have been expressed in social studies textbooks since the 1870s, and researched the actual situation of understandings and recognitions concerning the words among students and teachers. Second, I found and analyzed lesson plans from the US and Australia that included the contemporary theory of anthropologists about "race". Third, I examined the recognition and understandings about "race" and "ethnicity" among Chamorro in Guam and the Mariana islands since they have been ruled under colonialism for 400 years and their situation is hybrid. I organized the research team with researcher and teachers. We developed the teaching methods and materials and gave a lecture at a teacher training conference.

研究分野：国際理解教育、社会科教育、文化人類学

キーワード：人種・民族 概念 文化人類学 教科書 教員 授業

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進む中でヒトの移動や交わりは増え、「人種」「民族」の有り様が急速に変容してきている。この用語の曖昧さや問題についての理解は多様かつ乏しい状況もある。「人種」は生物学的に支持されず、歴史的につくられたコロニアリズムに立脚した「概念」であるにも関わらず、日本の多くの人々は「人種」が存在すると考え、言動に影響を与えている。1940年代にアメリカの文化人類学者が「人種」の虚構性を唱えはじめ、日本でも文化人類学者や日本学術会議等によって、「人種」はつくられた概念であり、それが歴史的な差別を生んできたことが明らかにされている。「民族」の語も同様に曖昧さがある。

教育分野においても、教科書や授業でのこれらの用語使用についての曖昧さや乱雑さを指摘することができる。人類学者の青柳真智子らは『中学・高等教育と文化人類学』(1996、大明堂)において、「人種」「民族」に関する中学・高校の社会科教科書分析を行い、ほとんどの地理の教科書には人種と民族の定義があり、用法や定義の混在の問題を指摘している。人類学者が中学・高校の教科書の記述について言及したことはあったが、小学校教科書記述に関する研究はほとんどない。しかし、「人種」「民族」という用語の初出は小学校社会科教科書にあり、そこで獲得する概念や知識は、これらの用語の理解に影響を与えるだろう。

『日系移民学習の理論と実践』(2008年、明石書店)、「ポストコロナルの視点にたった先住民学習の教材開発」(科研若手研究(B)、2008-2010年、研究代表者)、『先住民学習とポストコロナル人類学』(2012年、科研研究成果公開促進費、お茶の水書房)、「ポストコロナルの視点にたった太平洋地域学習の教材開発」(科研若手研究(B)、2011-2014年、研究代表者)の研究を行い、教育分野でマイノリティ集団が国家・地域でどのように教えられているかを研究し、成果を示してきたが、その過程で文化人類学の研究成果に学ぶところが多く、同時に人類学の先端の研究成果が教育活動に反映されていないこと、反映されるのに時間がかかることに気づき、人類学と教育学をつなぐ学際的な研究の必要性があることが明らかになった。

「人種」「民族」概念を検討するにあたり、文献における概念整理に加え、実在するヒト集団であるグアム先住民民族チャモロを事例に研究することが本研究の特徴的な点である。マゼランがマリアナ諸島のグアムに上陸した後、333年間にわたってスペインがマリアナ諸島を支配した。その後のアメリカ、ドイツ、日本、第二次世界大戦後のアメリカによる統治と合わせて約500年間に、殺戮、混血、文化的虐殺(Cultural Genocide)、言語変容、習慣の変化が起こった。チャモロの人々はグローバル化の波に翻弄されながら生き抜いてきた人々であると言える。第二次世界大戦後は「グアメニアン」という新たなヒト集団がアメリカによって規定された。1950年代には人口の90%を占めていたチャモロが、移民の流入によってマジョリティから現在40%を下回るマイノリティへと、50年間で人口割合が激減した。

そうした中で、戦略的本質主義的に「チャモロ」を掲げることで、アイデンティティの育成にとどまらず、彼ら自身がチャモロとしてのヒト集団を創ろうとしている動きがある。従来から太平洋地域で指摘されてきたような「創られた伝統」だけではなく、政治的運動、教育を通して「創る人種・民族」が当事者の中から派生している。チャモロはポストコロナルの考え方をもちマイノリティ集団の特徴を有し、「人種・民族」について考える格好の対象である。外からの眼差しによって生成される概念ではなく、内から派生するダイナミックな動きがある特定の集団を事例に、教育というファクターを通して研究を進めつつグローバル時代の人種・民族の概念を論考し、その成果を教育学に活用できるのではないか。

小学校学習指導要領において「人種」「民族」の用語は学習内容として示されていないものの、教科書では用語として取り上げられている(複数の教科書会社出版の教科書を確認)。ここでは「人種」の概念が問い直されることもなく教授されている。教科書執筆者や編集委員、教科調査官は基本的に教員や教育学者で構成され、人類学に精通した人物がほとんどいないことも問題である。したがって、人類学に関する問題点が見落とされ、修正されることのないままに過ぎてきた。その問題点を明らかにして教育の進展に貢献しようとする新たなチャレンジで有り、これまで「先住民学習」をテーマに人類学と教育学を研究してきた視点で研究を展開できる。研究代表者は、9年にわたりグアムの歴史家・研究者・教育委員会・社会教育機関と関係を深めながらネットワークを構築してきた。また、グアムのチャモロダンスグループに所属して、社会教育や学校教育におけるエスニック・アイデンティティの育成活動や、「伝統的な文化の創造」をメンバーの一員として参与観察してきた。こうした経験による知見を生かすことができることも、本研究の背景にある。

2. 研究の目的

日本の学校教育における「人種」「民族」をめぐる扱いも旧態依然とした解釈に基づき、グローバル化の進展とともに著しく変容するヒトの有り様の現実と学校で教えられていることの乖離が大きく、教材や教師の意識改革を促すことは急務である。

そこで本研究では、文献研究と海外の民族アイデンティティ育成の戦略と教育のあり方の事例研究を通して「人種」「民族」の概念と問題点を整理し、教科書記述の調査、「人種」「民族」の概念をとりあげた授業案や教育実践の検討と構築主義的な授業実践開発を行い、文化人類学研究成果を教育に反映させるための積極的な試みを行うことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は「人種」「民族」の概念に関する文化人類学の研究成果を教育学に反映させることを目的とし、(1)理論研究(2)国内調査(3)海外調査(4)教材開発研究(5)実践研究と協議、から構成する。

理論研究では、文化人類学領域および教育学領域の双方から文献を収集し、「人種」「民族」を教えるための理論の構築を行う。国内調査および海外調査では、教科書における「人種」「民族」に関する記述の実際とその問題点を明らかにし、先駆的な実践事例の調査、一覧リストの作成を主とする。海外調査(グアム、北マリアナ諸島、フィリピンなど)では主にグアムのチャモロ先住民族を事例に「人種」「民族」の現代の在りようを考察する。教材開発研究では、理論研究、国内・海外調査結果をもとに教材の開発を行い、実践研究をふまえて研究報告を行うとともに、教科書記述改善にむけて提言をする。

1年次は、理論研究において文献リストを作成するとともに、基礎データを集め、理論構築の作業を開始する。共通の関心を寄せる研究者や教師との情報交換を進め、ネットワーク化をはかる。2年次は、さらに文献整理を進めるとともに各文献のレビューをする。教材開発研究では具体的な構想をたて議論する。中間報告として研究会や学会大会などで積極的に報告し、広く意見を求める。3年次は、文献から整理した理論や定義の再検討、教科書記述改善に向けた提言や、教員研修の場を利用し研究成果の普及に努めながら、後半には研究成果をまとめるための作業を行う。

4. 研究成果

研究で得られた主な成果は下記の(1)~(5)である。

(1) 理論研究

文化人類学領域および教育学領域の双方から、「人種」「民族」に関する文献を収集し、理論構築のための整理を行った。その際、竹沢泰子『人種概念の普遍性を問う - 西洋的パラダイムを超えて - 』(2005年、人文書院)などを論考の基盤とし、整理の指標とした。「人種」は概念であるという考え方を批判する文献にも目を通し、教育活動にどのように論考を活用していくことができるか、検討した。

日本の教科書記述における「人種」「民族」に関する記述を明治時代から整理し、時代背景とともに変容していく様子が明らかになった。しかし「人種」「民族」は固定化しているような表現が強く、現行教科書記述の問題点も明らかになった。日本の社会科教科書記述の改善にむけた視点を抽出し、教科書記述に反映できるように、研究会や教員研修などで積極的に発信した。海外の教科書に関しては、アメリカのものしか入手できず、調査ができたとは言えないが、「人種」「民族」に関する詳細な説明があり、文化人類学研究の成果が反映されている様子が窺えた。

(2)国内調査

小学校・中学校・高等学校の教育現場における「人種」「民族」に関する授業の実態について、情報を集めるとともに、過去に関係する実践や研究をした人にインタビューを通して調査し、興味関心を同じくする教員・研究者のネットワークを構築することができた。教員研修会などを通して教員の「人種」「民族」という用語に関する意識調査を行った。教員の知識や理解は、高校生段階の社会科学習レベルに止まり、新しい学問の知見に触れる機会がなく、ものの見方・考え方を最新化させる必要があることがわかった。児童生徒の理解の実態についても、機会を捉えて調査した。メディアの影響を強く受けているせいか、「人種はある」「人種は黒人、白人、黄色人種に分けられる」と考えている実態があることがわかった。日本文化人類学会関東地区研究懇談会において、中学高等学校における学習内容にどう人類学を反映させるかというテーマで協議会が開かれ、そうした場で問題意識を共有した。

(3)海外調査

多民族国家と言われる国・地域や、植民地支配の歴史をもつ国・地域の学校教育現場(小・中・高校)における「人種」「民族」に関する授業について情報収集(含む実地調査)を計画した。収集することができた資料を吟味した。アメリカ文化人類学会が示している「教師用指導の手引き」“Race”の分析や活用について分析した。

フィリピン、グアム、サイパン、ワシントン州のチャモロコミュニティを訪ね、出生地と生育歴にかかわってraceやethnicityに関してどのような意識をもっているのかについてヒアリングや教育活動を観察した。特にグアムでは継続的にエスニック・アイデンティティ育成活動の参与観察を行った。2017年5月22日から6月4日にグアムで開催された第12回太平洋芸術祭では、「人種」「民族」のあり方が急激に変貌している太平洋の島々が集い伝統的民族文化を披露する場であり、それらの表象の在り方と教育(社会教育・学校教育の双方)を観察し、ヒトの在り方の変容とアイデンティティ育成や「民族」をどう捉えるかという視点を本研究に役立てることができた。

サイパンでの調査では、植民地主義時代の名残と現代の移民の流入において、混血、文化変容、言語変容が進み、すでに「人種」「民族」が可視化できない状況であり、「人種」「民族」に関して、人々の意識も他地域とは異なる感覚がある様子であった。この点についての調査はサ

サンプル数が少ないため、今後規模を拡大して調査を行わなければ仮説や結果を導くことはできない。

(4)教材開発研究

「人種」「民族」をテーマとした教材開発にむけての活用可能資料の整理を行い、研究協力者と共有し、「人種」「民族」概念についての教材開発にむけた学習会を開始した。その際、高橋健司による「世界史教育における『人種』概念の再考 - 構築主義の視点から -」(日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.94、2005年)などの先駆的な研究の検討も行い、開発の可能性と課題を出し合い、授業実践の可能性を検討した。

連携研究者や研究協力者との情報交換を適宜行い、調査結果活用の方向性の検討、教材開発の性格、具体的な手順の検討、教材の選定を行い、教材化を進めた。また、チャモロを事例にした教材の普及を行なった。

ある教員研修会(長野)で学校の図書室や教室にある世界の多様な人が描写されている絵本や児童図書を持参してもらい、そこに描かれている絵や文言に注目して、「人種」「民族」について、子どもたちの周りにおける情報について協議をした。教員自身の「人種」「民族」という用語についての認識を改める必要性を説いた上で、どのような教科、単元、学年でこうした観点を活かすことができるか、教員自身に思考させることも教材開発に結びつくことがわかった。

(5) 実践研究と協議

現職教員、小学校教諭の経験をもつ大学教員による授業検討会を開き、実践に向けた話し合いと実践報告・検討を行った。「はだの色」をキーワードとした人種について考える小学校での授業について二つの事例報告(神奈川)中学校における多文化共生や人権と関連づけた「人種」を考える試験的実践(京都)の検討、それらの授業での児童生徒の学びについての考察を協力者で行った。問題点や改善点について人類学的見地と教育学的見地の双方から検討をした。実践をした授業の修正と、提案授業の検討を行った。

実践する段階で、「人種」「民族」に関わる授業を展開する際に、社会科学的な見方考え方からだけでは迫れない要因として、学習者集団(学級やクラス)に外国につながる背景をもつ子や、いわゆる「ミックス」「ハーフ」と呼ばれる子ども、外見的な特徴が一般的な日本人とは異なる子の存在が挙げられる。当事者である彼ら/彼女らと保護者をいたずらに刺激したり、好奇の目に晒したりすることを避けながら、「人種」を考える授業を成立させるための環境整備として何が必要なのかを検討する必要性も明らかになった。

研究成果の国内外における位置づけとインパクトについて、アメリカやオーストラリアに比べると本研究は後発研究であるが、未だに人種主義が一般に浸透している国が多いことを考えると、本研究で取り組んだ教育における改善の試みはモデルとなりうる。しかし、日本の教育に関連する場において日本語で発信していても、国を超えて影響を与えることはできないので、広く世界に発信することが今後の課題である。43rd Annual Pacific Circle Consortium (July 8-12, 2019, Guam. Conference Theme: Connecting Past & Present: Educating Across Generations)で研究成果の一部を発表することを予定している。

一方、日本の教育界にはインパクトがある。先に述べてきたように、教員や児童生徒の認識は古く、教材にも改善の余地が多くある。今後の展望としては、研究成果を活かして「人種民族をどのように教えるか」という趣旨の書籍を刊行すること、教員研修会や学会などで発信をすることを予定している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

居城勝彦・東優也・中山京子「グアムと日本をつなぐ教育実践-ポストコロナルな視点にたった小学校における先住民学習の実践」『東京学芸大学附属学校研究紀要』査読無、44、2017、147-157。

中山京子「2016年グアム・太平洋芸術祭にみる教育とアイデンティティの育成-チャモロアイデンティティの覚醒とチャモロダンス」『帝京大学教育学部紀要』査読有、2017、109-119。

[学会発表](計5件)

中山京子「文化人類学をどう教室に持ち込むか-文化人類学からの実践例」日本文化人類学会関東地区研究懇談会、2018。

中山京子「社会科における『文明』の扱い-太平洋の視点を導入する」日本社会科教育学会第68回全国研究大会シンポジウム、2018。

中山京子「博物館企画展示『南の楽園マリアナ諸島の真実』を創る-大学における国際理解教育実践」日本国際理解教育学会第28回研究大会、2018。

中山京子「教員養成系大学で育成すべき資質・能力と国際理解教育-グアム先住民チャモロとつながる活動を事例に-」日本国際理解教育学会第26回研究大会、2016。

中山京子・居城勝彦・東優也「グアムと日本をつなぐ教育実践-ポストコロナルな視点にたった小学校における先住民学習の実践-」日本国際理解教育学会第26回研究大会、2016。

〔図書〕(計3件)

中山京子、明石書店『グアム・チャモロダンスの挑戦-失われた伝統・文化を再創造する-』
2018、170.

中山京子他、ナカニシヤ出版『大学における多文化体験学習への挑戦-国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する-』2018、188-203.

中山京子他、ナカニシヤ出版『大学における海外体験学習への挑戦』2017、60-75.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。